

# 女子中高生のキャリア意識に影響を及ぼす要因

星野敦子，津吹 卓

## 1. はじめに

1999年、中央教育審議会答申「初等中等学校と高等学校との接続について」において、「キャリア教育の推進」が提言された。これは我が国キャリア教育始動の契機とされており、提言からすでに10年あまりが過ぎようとしている。その後2004年には、文部科学省「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議」の報告書「児童生徒の職業観・勤労観を育てるために」が出され、実質的なキャリア教育がスタートした。本報告書において、キャリア教育は「キャリア概念に基づき、児童生徒一人ひとりのキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリアを形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育」と定義されている。

キャリア教育の実践は、従来の職業教育・進路指導を中核に据えながらも、「働くことの意義」や「専門的な知識・技能を習得することの意義」の理解や態度の育成に重点をおいて進められている(仙崎武他, 2008)。我が国のキャリア教育は本格的な実践がスタートしてから7年が経過し、実態の把握がようやく始まった段階であるといえよう。このような状況の中、「高等学校におけるキャリア教育の在り方に関する調査研究」のための協力者会議が立ちあげられ、2006年11月、報告書において、15の提言が示された。

提言13(初等中等教育におけるキャリア教育の効果の評価)においては次のように述べられている。

提言13：在学中のみならず卒業後についても追跡調査を行うなど、教育効果、経済効果等、様々な方向から「効果という視点からの評価」をする

ことも考えられる。

一方、女性のキャリア形成、とりわけ専門職への就業と離職防止・復職支援は近年社会において大きな課題となっている。専門職において女性が占める割合は、例えば医師の場合、国家試験合格者に占める割合が33.8%であるにもかかわらず、医師に占める割合は16.5%にとどまっており（厚生労働省、2004）、離職率も高い。平成21（2009）年度男女共同参画推進関係の政府予算においても、女性医師・看護師等の離職防止・復職支援の実施や、女性研究者養成システム及び支援モデル育成が盛り込まれ、「男女共同参画を推進し多様な選択を可能にする教育・学習の充実」に1,564億円、「男女の職業生活と家庭・地域生活の両立の支援」に1兆3,709億円が計上されている（内閣府男女共同参画局総務課、2009）。

社会で活躍する女性専門職の育成を支援し、困難な状況においても仕事を継続していこうという強い意思をささえるキャリア意識を育てていく上で、中等教育におけるキャリア教育への期待は大きい。今後のキャリア教育の在り方を考える上で、現段階で女子の専門職意識形成に対する中等教育段階におけるキャリア教育の効果を実証・分析することが必要である。本研究は、女子中等教育においてキャリア意識の形成がいかになされるかを検証し、特に中高一貫校におけるキャリア意識の育成の在り方を検証するための予備分析となるものである。今回は、女子中学・高等学校におけるキャリア意識の実態とこれに影響を与える要因について、アンケート調査に基づいて、共分散構造分析による分析を行った。

## 2. 調査の概要

2011年6月に十文字中学校・高等学校において、「学校通し」によるアンケート調査を実施した。対象は中学1年（6クラス）高校1年（8クラス）及び高校3年（8クラス）の全生徒であり、有効サンプル数は848であった。各学園の内訳は図1に示した通りである。調査項目は「将来の仕事と働き方」「仕事に関する意識」「保護者との関わり」「希望の仕事に就くために必要なこと」「キャリア教育に対する興味」及び「30歳時の理想の生活」とした。

## 女子中高生のキャリア意識に影響を及ぼす要因

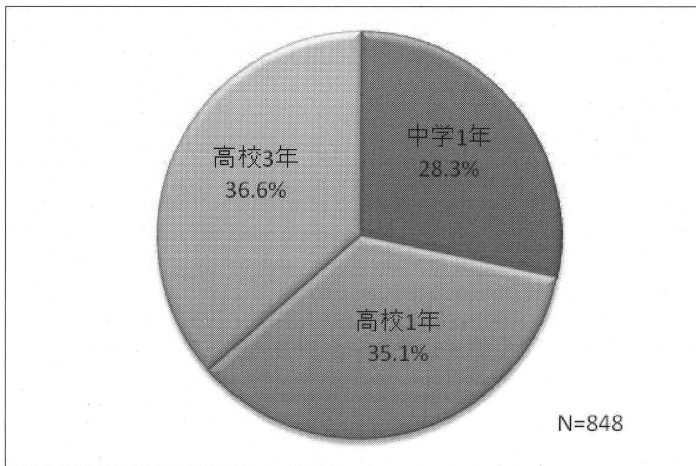


図1 回答者の内訳 (学年)

### 3. キャリア意識の実態

#### (1) 将来の働き方について

図2は女性の働き方としてどのような形が望ましいかを聞いたものである。「仕事と家事・育児の両立」が42.6%、「家事・育児に問題のない程度に働く」が45.8%とほぼ同数だったのに対して、「家事・育児に専念」は5.0%にとどまっており、生徒の9割程度が何らかの形で仕事をしていきたいと考えている。

また、図3は学年ごとにまとめた結果である。これを見ると、学年が上がるに従って「仕事と家事・育児の両立」の割合が増加していることがわかる。中1では36.1%であるが、高3になると46.6%になっている。 $\chi^2$ 乗検定の結果、5%水準で有意差が認められた。

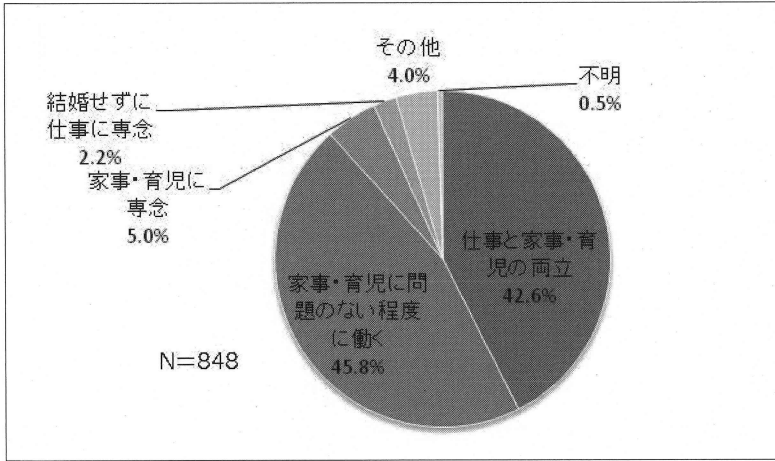


図2 女性としての働き方 (全体)

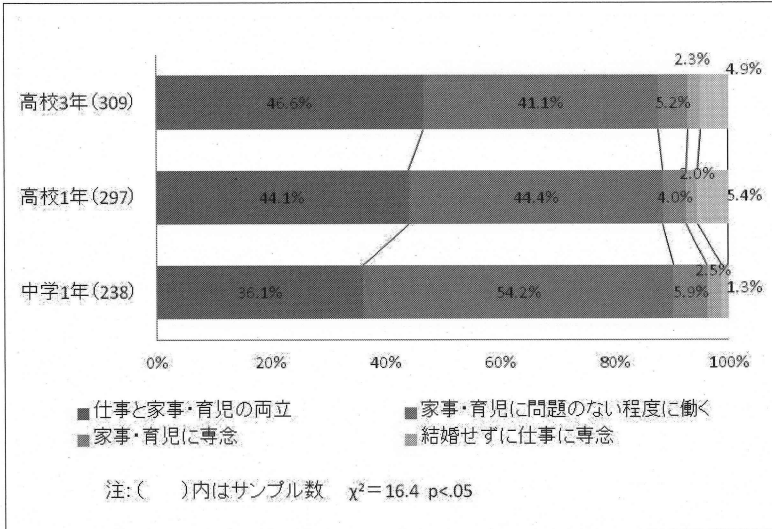


図3 女性としての働き方 (学年比較)



## 女子中高生のキャリア意識に影響を及ぼす要因

図4は将来の働き方の希望についてまとめたものである。「結婚後も継続して仕事」と「結婚せず継続して仕事」を合わせると約5割を占めており、「結婚後仕事を辞めるが子供が成長後再び就業」を上回っている。国立社会保障・人口問題研究所の調査(2010)によれば、女性の理想のライフコースについて、「再就職コース(結婚し子どもを持つが、結婚あるいは出産の機会にいったん退職し、子育て後に再び仕事を持つ)」が最も多く、全体の35.2%を占めている。このデータと比較しても、中高生の意識が実態にきわめて近いものであることが分かる。

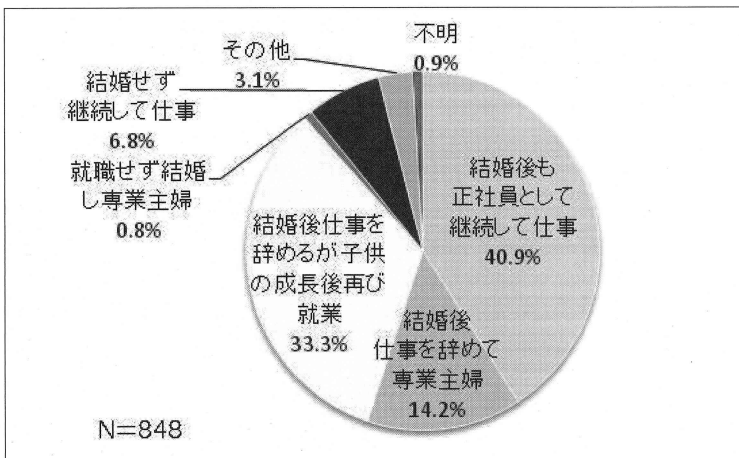


図4 将来の働き方の希望

### (2) 将来の職業について

図5は希望の職業について聞いたものである。全体では「はっきり1つに決まっている」が21.3%であり、「まだ決まっていない」は3割弱となっている。すなわち、約7割の生徒が将来の仕事を具体的に考えていることになる。

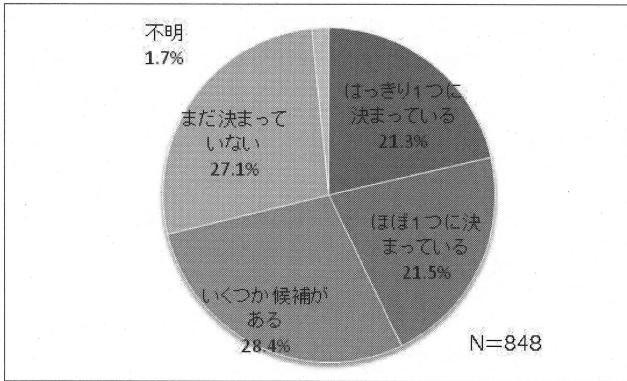


図5 希望の職業について

図6は、高校3年生の生徒が、希望の職業を決めた時期に関するデータをまとめたものである。最も多いのが「高校2年生」28.1%，次いで「高校1年生」24.0%となっている。高校入学前に決めていた者が全体の4割弱を占めている。

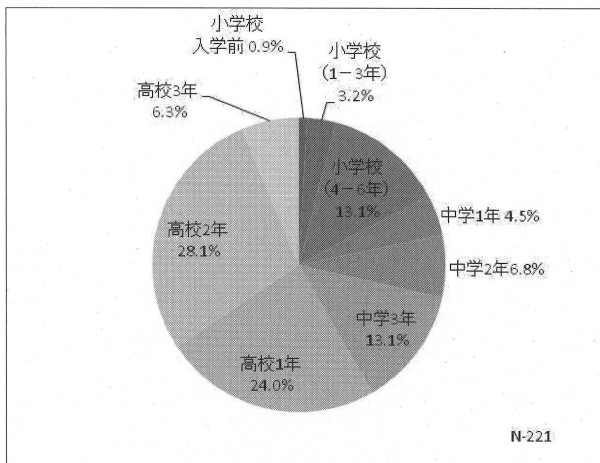


図6 希望の職業を決めた時期 (高校3年生)

希望の職業として多かったものとしては、「教師（保育士、幼稚園教諭等含む）」「医師・看護師・医療関係」「薬剤師」「管理栄養士」「客室乗務員」などがあつた。総体的にみて、希望職種は多様化しており、「アニメ・ゲーム関係」「スポーツ関係」「テレビ・マスコミ関係」「ダンス関係」などをはじめとして様々な職種があげられている。

#### 4. 働き方の希望による意識の比較

図2において示した、女性としての働き方について「仕事と家事・育児の両立」グループ（以下「両立グループ」）と、「家事・育児に問題のない程度に働く」グループ（以下「家事育児グループ」）の2つについて、キャリア意識がどのように異なっているか比較分析を行った。

##### (1) 働くことに関する意識

図7は、働くことに関する意識について、各グループの平均値を示している。t検定(両側)によって、平均値の差の検定を行った。全体の傾向としては、「好きなことや関心のあることを仕事にしたい」「大学で学んだことを生かせる仕事につきたい」「社会や人のためになる仕事をしたい」などの項目が高い値を示した。一方、「気に入る仕事が見つからなければパートやフリーターでも構わない」「生活するのに十分なお金があれば働く必用はない」「自分で会社やお店の経営をしたい」などは「そう思わない」に近い値を示している。

2グループの比較について見ると、有意差が認められたものは以下の4項目である。

- ⑤仕事は大変でも収入が高いほうがよい
- ⑧自分の力以上の仕事を与えられたら、勉強をしてでもなんとかこなしたいと思う
- ⑨大学で学んだことを生かせる仕事につきたい
- ⑪生活するのに十分なお金があれば働く必用はない

このうち、⑤⑧⑨については「両立グループ」が上回っており、仕事に対する積極的な姿勢が見られる。⑪、ならびに有意差はないが⑥については「家

事・育児グループ」が上回っており、生活における仕事に対する優先度が低いことを示している。

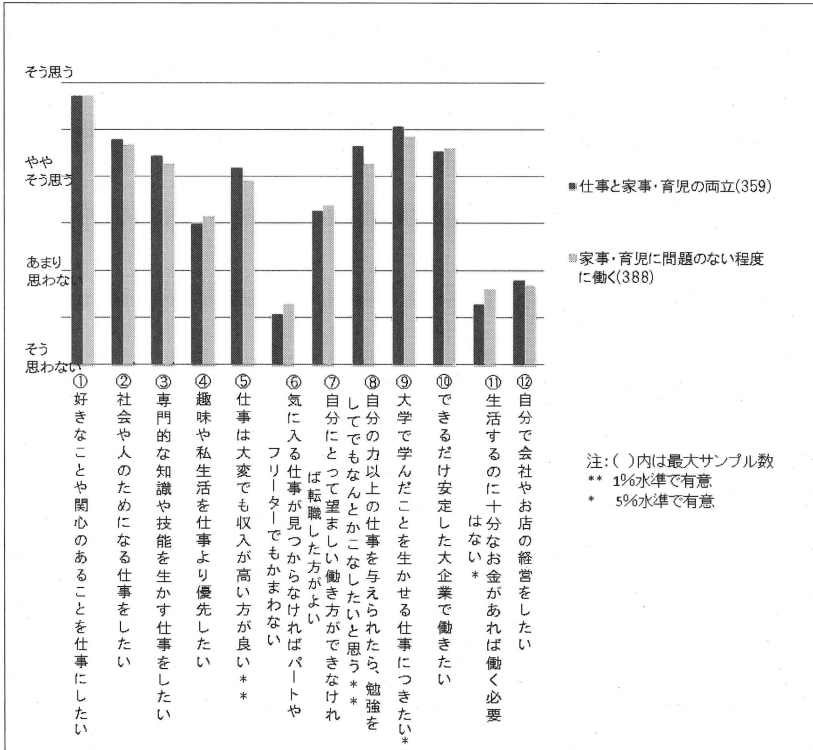


図7 働くことに関する意識 (グループ比較)

## (2) 両親との関わり

仕事に対する意識の違いがどのような要因によって生じたかを調べるために、幼いころから現在までの両親、兄弟、または親戚の人などとの関わりについて聞いた。図8は各グループの平均値を示している。項目ごとの差はあまり大きくないが、学校や勉強、友達について話すことが、高い値となっている。一方キャンプや野外活動、美術館・博物館などについては低めの値と

女子中高生のキャリア意識に影響を及ぼす要因

なった。2つのグループの間で有意差が認められたのは以下の5項目である。

- ③本や絵本を読んでもらうこと
- ⑥仕事や働くことについて話すこと
- ⑦ニュースや社会の出来事について話すこと
- ⑧美術館や博物館， 展覧会などに行くこと
- ⑫将来や進路について話すこと

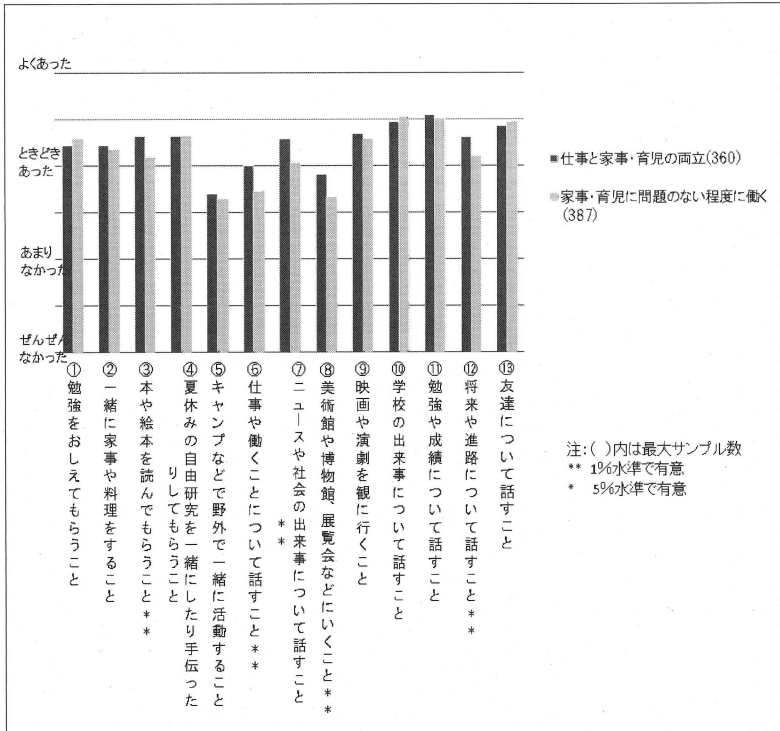


図8 両親との関わり (グループ比較)

5項目すべてについて、「両立グループ」の平均値が高い。仕事や将来について話すことだけでなく、「ニュースや社会の出来事について話すこと」や「美術館や博物館， 展覧会などに行くこと」のような社会に目を向けた活動が、キャリア意識に影響をあたえていると考えられる。

### (3) 職業・進路に関する学習に対する興味

図9は職業・進路に関する学習について聞いた結果をまとめたものである。すべての項目において「両立グループ」の平均値が上回っている。全体的に最も興味が高かったのは「①興味のある職業について自分で調べること」であり、次いで「⑤職場で実際に職業体験をすること」となっている。両グループ間で有意差が認められたのは以下の4項目である。

- ①興味のある職業について自分で調べること
- ②社会で活躍している人の話を聞くこと
- ③社会で活躍している先輩の話を聞くこと
- ④職場を訪問して見学すること

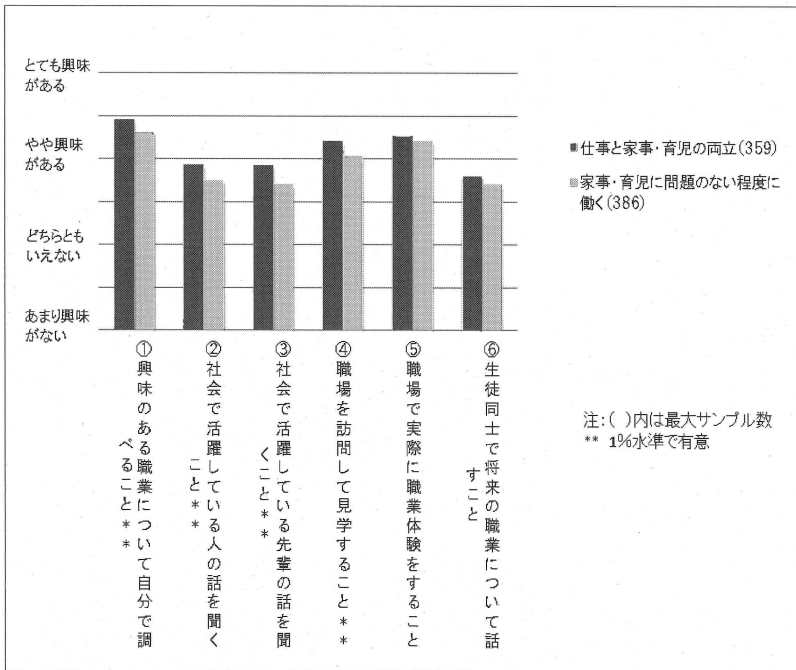


図9 職業・進路に関する学習に対する興味 (グループ比較)

## 5. キャリア意識に影響を与える要因

「継続して働く」という意思がどのような要因によってもたらされているのかを調べるために、多重指標モデルを作成し、共分散構造分析を行った。従属変数として、「仕事優先度（仕事が優先か、家事・育児が優先か）」ならびに「仕事の継続度（将来のはたらきかたの希望）」を利用することとし、独立変数として以下の3つを設定した。

- ①仕事に対する意識
- ②幼いころからの両親等との関わり
- ③女性が仕事することについての仕事の優先度

このうち、①と②については因子分析により、それぞれについて潜在変数を3つずつ作成した。

表1 仕事に対する意識（因子分析）

	因子		
	やりがい志向	キャリア志向	生活志向
③専門的な知識や技能を生かす仕事をしたい	.577	-.067	.102
⑨大学で学んだことを生かせる仕事につきたい	.513	.135	-.016
⑧自分の力以上の仕事を与えられたら、勉強をしてでもなんとかこなしたい	.460	.031	-.183
①好きなことや関心のあることを仕事にしたい	.444	-.028	.094
②社会や人のためになる仕事をしたい	.390	.026	.000
⑩できるだけ安定した大企業で働きたい	-.047	.845	-.032
⑤仕事は大変でも収入が高い方がいい	.125	.362	.079
⑪生活するのに十分なお金があれば働く必要はない	-.086	.139	.496
⑥気に入る仕事が見つからなければパートやフリーターでもかまわない	-.016	-.080	.437
④趣味や私生活を仕事より優先したい	.042	-.001	.333
⑫自分で会社やお店の経営をしたい	.168	-.001	.320
固有値	2.136	1.527	1.180
累積(%)	19.42	33.30	44.03

## (1) 「仕事に対する意識」に関する因子

表1は「仕事に対する意識」の因子分析（主因子法，プロマックス回転）の結果である。固有値1以上で、「やりがい志向」「キャリア志向」及び「生活志向」の3因子が抽出された。

「やりがい志向」因子は、「③専門的な知識や技能を生かす仕事をしたい」や「⑨大学で学んだことを生かせる仕事につきたい」など、仕事の専門性や、自分にとってのやりがいを重視した因子である。

「キャリア志向」因子は「⑩できるだけ安定した大企業で働きたい」「⑤仕事は大変でも収入が高い方がよい」など、仕事の質ややりがいよりも、高収入で安定した仕事を志向する因子である。

「生活志向」因子は、「⑪生活するのに十分なお金があれば働く必用はない」「⑥気に入る仕事が見つからなければパートやフリーターでもかまわない」「④趣味や私生活を仕事より優先したい」など、仕事よりも自分の意志や私生活を大切にすることを志向する因子である。3因子で説明できる分散は44.0%となった。

## (2) 「幼いころからの両親等との関わり」に関する因子

表2は「幼いころからの両親等との関わり」の因子分析（主因子法，プロマックス回転）の結果である。固有値1以上で、「学校・友達」「文化・活動」及び「仕事・社会」の3因子が抽出された。

「学校・友達」因子は、学校での出来事や勉強，成績について，あるいは友人について話すことを表す因子である。

「文化・活動」因子は，美術館や博物館に行くといった文化的活動のほか，読書，勉強，家事などをともに行った経験や，キャンプなどの野外活動なども含む因子である。

「仕事・社会」因子は，仕事や将来について話すことと，ニュースや社会の出来事について話すことを含む因子である。3因子で説明される分散は，全体の54.8%である。



女子中高生のキャリア意識に影響を及ぼす要因

表2 幼いころからの両親等との関わり（因子分析）

	因子		
	学校・友達	文化・活動	仕事・社会
⑩学校の出来事について話すこと	.912	.028	-.087
⑬友達について話すこと	.837	.002	-.038
⑪勉強や成績について話すこと	.529	-.008	.272
⑧美術館や博物館、展覧会などに いくこと	-.099	.657	.006
③本や絵本を読んでもらうこと	.004	.583	.036
⑤キャンプなどで野外で一緒に活 動すること	-.045	.517	-.018
⑨映画や演劇を観に行くこと	.129	.463	.001
②一緒に家事や料理をすること	.027	.447	.105
④夏休みの自由研究を一緒にした り手伝ったりしてもらうこと	.190	.397	-.050
①勉強をおしえてもらうこと	.178	.328	.041
⑥仕事や働くことについて話すこと	-.143	.058	.834
⑫将来や進路について話すこと	.234	-.137	.695
⑦ニュースや社会の出来事につ いて話すこと	-.025	.123	.604
固有値	4.591	1.401	1.131
累積 (%)	35.31	46.09	54.79

(3) キャリア意識に影響を与える要因

因子分析によって抽出された6つの因子を潜在変数として、「仕事優先度」と「仕事継続度」に対する影響を調べるために、多重指標モデルを作成した。図10は各変数の関係を表した多重指標モデルである。GFI=.935 AGFI=.917 RMSEA=.046であり、モデルの適合度は問題ない。しかしながら、係数を見ると、最も大きなもので「仕事優先度」から「仕事継続度」に対する係数(0.35)であり変数間の規定力は大きいとは言えない。「仕事継続度」に対するこれ以外の直接効果をみると、「生活志向」が-0.18でややネガティブに影

響している程度である。「生活志向」は仕事の継続を阻む因子であるため、本来ならより強くマイナスの値が出るべきであるが、それほどでもないということは、生徒の意識が、ややあいまいであるのではないかと考えることができる。

「仕事継続度」に対する「仕事優先度」を通しての間接効果としては、「生活志向」「学校・友達」「仕事・社会」などの影響が見られる。「仕事優先度」に対しては「生活志向」の係数は-0.20、また「学校・友達」の係数は-0.23となっている。すなわち、仕事よりも私生活や趣味を重視する価値観や、学校のことを家でよく話す傾向（母親が家にいる時間が長かったからと予測できる）は「仕事継続度」にネガティブな影響をもっている。

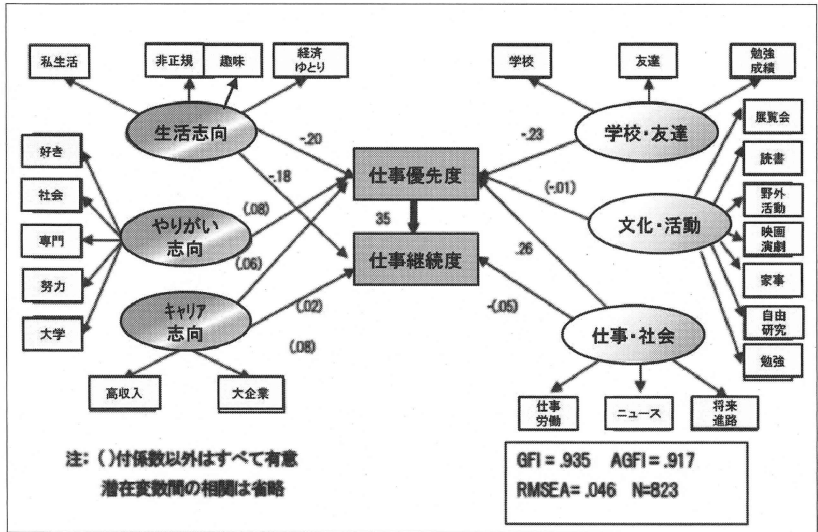


図10 キャリア意識に影響を与える要因

一方「仕事・社会」因子の「仕事優先度」に対する係数は0.26である。家で仕事や社会のことを良く話す傾向が「仕事優先度」を高め、結果的に「仕事継続度」を高めていると考えられる。

## 6. まとめ

### (1) 女性の働き方と将来の仕事

女性の働き方については、「仕事と育児の両立が望ましい」が42.6%、「家事・育児に問題のない程度に働くのが望ましい」が45.8%であり、わずかではあるが、家事育児を優先する傾向が見られる。また、「両立が望ましい」と考える生徒は学年があがるほど増加し、高3が最も割合が高かった。

また仕事の持ち方については、5割弱の生徒が、家庭を持っても継続して正社員として仕事をしたいと考えている。30代から40代の女性を対象とした調査から（内閣府男女共同参画局、女性のライフプランニング支援に関する調査2006）、実際に仕事を継続しているのは15%程度あることを考える、生徒の意識の高さとともに、現実の厳しさとの間に差があることがわかる。また、将来就きたい仕事については、約4割の生徒が1つに決まっていると答えており、希望職種には専門化・多様化の傾向が見られる。

十文字中学・高等学校の生徒の傾向としては、総合的に専門職志向が強く、仕事に対する前向きな姿勢が見られる。また学年が上がるにしたがってキャリア意識が高まっており、結婚後も仕事を継続して意向という意欲が高いといえる。

### (2) 「両立グループ」と「家事・育児グループ」の比較

「仕事と育児の両立が望ましい」グループと、「家事・育児に問題のない程度に働くのが望ましい」グループについて、平均値の比較をおこなったところ、以下の点が明らかになった。

「両立グループ」について、仕事に対する積極性が顕著に表れた結果となった。大学で学んだことを生かし、また努力によって困難な仕事もこなしていくという姿勢がみられた。一方「家事育児グループ」は仕事に対してネガティブな項目のみ前者を上回った。

親との関わりについては、仕事や社会的な活動についての項目で「両立グループ」の平均値が上回った。その他、「本や絵本をよんでもらうこと」についても「両立グループ」のほうが高く、1%水準で有意差がみられた。学校や友達の話など、日常的な項目については「家事育児グループ」のほうが

平均値が高かった。

職業・進路にかかわる学習に対する興味についてはすべての項目について「両立グループ」が上回っており、「社会で活躍している先輩の話を聞く」が最も両グループの差が大きかった。

### (3) 多重指標モデルによる分析

総体的に見ると、親との関わり方が仕事についての考え方（優先度）に影響を与え、さらにそれが働き方（継続度）に影響することが明らかとなった。仕事に関する意識は「生活志向」（生活・趣味を優先、お金があれば働く必要はない）以外は規定力をもたない。また、「生活志向」の高さは「仕事優先度」に対してネガティブな影響をもち、働き方にも直接影響している。

## 7. 今後の課題

本調査の分析から、キャリア意識に対する母親の影響が大きいこと推測される結果が得られ、また学年が上がるほどインターネットや友人の影響をうけるようになることも明らかとなった。また希望職種調査から専門職志向が強い傾向も見られた。

今後は、キャリア意識を育成するためのキャリア教育の在り方について具体的に示すことが必要である。そのためには、OGに対するインタビューなどの質的な調査を合わせて実施していく必要がある。また、今回分析できなかった将来の生活についての記述データの分析を進め、生徒が抱えている生活像の実態からキャリア教育について考えていることも有効であると考えられる。

## 謝辞

アンケートの実施に当たり、ご快諾くださった十文字中学・高等学校校長 草野一紀先生、また実際に生徒を対象としてアンケート実施してくださった学年の先生方に心よりお礼を申し上げます。

また、調査票の作成ならびに分析データの検証に当たり、東京大学社会科学

## 女子中高生のキャリア意識に影響を及ぼす要因

学研究所 附属社会調査・データアーカイブ研究センター SSJ データアーカイブから以下の個票データの提供を受けました。[モノグラフ高校生 高校生にとっての「働くこと」(ベネッセコーポレーション) 2004][進路選択に関する振り返り調査(ベネッセコーポレーション) 2005][女性のライフプランニング支援に関する調査(内閣府男女共同参画局) 2006]

### 【参考文献】

- 中央教育審議会答申(1999)「初等中等学校と高等学校との接続について」  
国立社会保障・人口問題研究所(2010)「第14回出生動向基本調査」  
厚生労働省(2004)「平成16年医師・歯科医師・薬剤師調査」  
文部科学省(2004)「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書-児童生徒の職業観・勤労観を育てるために-」  
内閣府男女共同参画局総務課(2009)平成21年度男女共同参画推進関係予算について、行政施策トピックス  
仙崎武他(2008)「キャリア教育の系譜と展開」社団法人雇用問題研究会

